

---

# **女性恐怖症の俺とヤンデレの幼馴染**

鎖 真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女性恐怖症の俺とヤンデレの幼馴染

### 【NNコード】

N9223M

### 【作者名】

鎖 真

### 【あらすじ】

女性恐怖症の主人公。そして、転校してきたヤンデレの幼馴染。

主人公は、幼馴染のせいで女性恐怖症に。幼馴染は主人公のせいでのヤンデレに。そんな二人の関係を少し描いた短編小説です。ヤンデレってのが、上手く書けてるのか分かりませんが、気軽に読んでみてください。

皆わんこんにちは。俺、椿薰つばきかお。いへ普通の高校1年生。だが、俺  
は 恐怖症なん。それは

「おーい。薰おはよー」

朝の登校時間。俺はいつもと同じように、7時半に家を出でいつもと同じ通学路を歩いていた。そこに俺の名を呼ぶ一人の女子が走つて僕の方へと向かってくる。

「う、うわあ！ 来るなー！」

「う、ひどい……」

俺の一言で、走ってきた少女は僕から約1・5mの所で急停止。腰まである長い黒髪を後頭部らへんでツインテールと言つ髪形にしている。スタイルは女子高生のそれ。一つ違うのは、胸が少し大きいくらい。そんな彼女の名前は、鈴桐玲音つかさ。つかさは、漢字ではなく平仮名。

中学1年の頃に知り合った、俺の数少ない女友達。

「い、ごめん

「まあ、いつもの事だもんね。薰の女性恐怖症は

そつ。俺の 恐怖症と言つのは、女性恐怖症。初めて会う女人ですら、俺は怖いと想つてしまつ。触られたらなんかしたら、一

瞬でオーバーヒート。

だが、何も最初からひだつた訳ではない。幼い頃に、近所の女の子が原因で僕はこうなってしまった。

「つかさはさ、何でこんな俺にかまつたりするの？」

「えー？ だ、だつてそれは……あの時からずっと……」

顔を真っ赤にして、手をモジモジしてどうも歯切れが悪い。

「うん。今日こそ言う。私ね、薫の事」「

「おー。朝から仲がいいですな、お一人さん」

「ん? 隆一? おはよう」

「おはよ。おはようさん」

つかさが何か言おうとした瞬間に、俺の親友の坂本亮一<sup>さかまたけりゅういち</sup>の登場で不発した。亮一とは、つかさと同じく中学1年の頃に出会った。こんな女性恐怖症の僕でも、男ならなんともない。

「で、つかさ。何を言おうとしたの?」

「別に……」

さつきまでとは大違い。完全に冷え切った眼差しで亮一を睨みつけるつかさ。何でそんなに不機嫌なんですか? つかさわん。

「そう。なら、早く学校行こつか」

「あ、ああ」

「そうね」

若干亮一がつかさにびびつてるよう見えるのだが、気のせいかな?

「はーい！ 席に着いてくださいねー」

黒板の前では、いつもやる気にのない担任。西条光先生が立つている。スーツの裾は出たままで、肩まである髪はボサボサ。眼が半開きと、本当に教師なのか疑いたくなる。

「お前等喜べー。今日はこのクラスに転校生がくるぞー」「先生！その転校生は、男ですか？女ですか？」

西条先生に、右手を天井に大きく上げて質問する亮一。  
皆の一番聞いたかったことを代弁して問う、その姿はよく言つた  
的な眼差しで見守られている。

「氣になるのか~。よし、なり越えてやれ!~。女だ~」「うおおおおおおおお~。」

青春真っ只中の男子生徒の雄たけび。唯一俺だけは喜ばなかつた。  
だつて、女だなんて。女性恐怖症の俺にとつては逆だよ……。  
それにして、何故か斜め前の前の前の席にいるつかさが、俺を  
チラッと見たかと思ったたら、何故かほつとその大きな胸を撫で下  
ろす。

なんか、今田の( )かさは変だな……

西條先生のやうな机のなれわづな顔ひともの、教室のドアがゆくべりと開かれる。

そして、入ってきたのはとんでもない美少女だった。日本人特有の黒髪をつかさ並みに長く伸ばして、それをボニー・テールと言う馬の尾みたいに結んでいる。

そして、きめ細かそうな白い肌に身長は平均的。男なら誰しもが虜になりそうなそんな彼女を見て、クラスの男子共は飛び跳ねたりと大騒ぎだ。

だが、俺は違った……。足の振るえが止まらない。寒気がする。鳥肌が一気に全身を覆う。初めて会う女に対しても、やつぱり怖いけどここまで恐怖を感じる事はない……。

「福谷奈々（ふくたになな）と申します。小学生の頃までこの街で暮らしていて、三年と二ヶ月ぶりに帰ってきました。どうぞよろしくお願いします」

そう言つて、彼女は二口と微笑む。そのかわいらしい笑顔は、更にクラスの男子を盛り上げる事となる。

ガクガクガク。心の底から恐怖が込みあげてくる。

一度微笑んだ後、彼女は僕と視線が合わさった瞬間に「——イツ」と誰にも分からぬように不気味な笑みを零した。

（福谷奈々……）

俺の女性恐怖症の原因。あの頃の恐怖は、僕の心の奥深くまで植え付けられている。

無理だ。今にも壊れてしまいそうになる……。

休み時間。福谷奈々は転校生の宿命として、質問攻めに合つていた。彼女はそんなクラスメイトの質問に常に笑顔を絶やさず答える。

俺はと言つと、自分の机に突っ放してガクガクと震える恐怖に耐えていた。いつ、彼女が僕の所に来るか分からぬ。小学六年の頃に引越しした彼女。3年の間に見違える程の美人になつていていた。だが、僕には彼女が福谷奈々と言う事が一目見ただけで分かつた。

彼女も、僕に漏らした不気味な笑み。覚えている気がする……。

「ねえ薫」

「え！？ああ…………つかさか…………」

「大丈夫？すごい汗だよ？」

ダメだ。恐怖が止まらない。精神的にかなりきついぞこれは…………。

「保健室行く？」

「そう、だな。保健室で一眠りしてくるよ」

確かに、このままでは授業どころではない。それに、保健室なら当分は安全なはずだ…………。

そう思い、俺は席を立ち上がり教室を出ようとした瞬間。声をかけられた。

「あら、どこかに行くんですの？椿薫さん…………」

おそるおそる後ろを振り返る。そこには、クラスメイトに囲まれている福谷奈々が俺に視線をロツクしていた。

「福谷さん、椿君の事知ってるの？」

「ええ、私がこの街に居た頃に親しくさせて頂いてた、幼馴染ですもの」

「「「「おお～」」」」

男子一同は、俺に鋭い視線を。女子一同は、ピンク色の雰囲気を出している。

「俺、保健室に行つてくるから。じゃあ

そう言つて、俺はその場から保健室まで猛ダッシュする。 やばいやばいやばい。あいつやつぱり俺の事覚えてやがった。俺の楽しい学生ライフが恐怖に変るかもしれん。でも、あいつ、どこか雰囲気が違つたな。性格変つたのか？俺は、そうであつて欲しいと願つ。

「すみません。少し体調が悪いので、休ませてもらえませんか？」

「あら。椿君じゃないの。また、例の女性恐怖症？」

保健室の先生。久遠怜奈先生。<sup>くおんれな</sup>俺の恐怖症の事は教師全員が知っている。一時期は、男子高に行かせたほうがいいと言つ事にもなつたが、社会に出たときの事も考えて、学生の内から慣れるように共学に入った。

「じゃあ、奥のベットでいい？別に今は誰も居ないからどうでもいいんだけど」

「あ、はい。すみません」

「いいのよ。あ、私はちょっと用事で、今から出張だけど一人で大丈夫？」

「大丈夫です。少し休めばいいと思うので」

「そう？じゃあ、ゆっくり休んでいいってね」

そう言つて、久遠先生は保健室を出て行つた。

「…………」

静かだ。この時間が今は、天国にでもこなみつて感じじる。

キーンゴーンカーンゴーン。チャイムの音で、俺は田を覚ました。ふと、時計を見ると既に11時を回った所だった。

「 もう、4時間田が終わつたのか……」

俺は、体を起して教室に戻りつかと思つたその時。ドアがガラつと開く音が聞こえた。

(虚だろ……まさか……)

むづくつと俺のいるベッドに足音が近づいてくる。背中に冷や汗がツーと流れるのが分かる。そして、シャツとカーテンが開かれた。

「 薫？ 大丈夫？」  
「 はあ、はあ、はあ。つかせか……よかつた~」  
「 何がよかつたよ。そんなに息荒ひしけやつて。ひやんと寝てなさいよ」

そう言つて、つかせは俺のふとんとかねよつとする。ビクッと体が跳ねる。それを見たつかせは、『めん……』と呟つて俺から少し距離をとる。

「俺は大丈夫だから、早く学食に行かないと混むぞ?」

「分かつた。ゆっくり休みなさいよ?今日はいつも以上になんだか

しんどそうだから」

「ああ。心配してくれてありがと」

「べ、別に心配なんてしてないけど……」

顔を真っ赤にして、保健室を飛び出すつかさ。何か、恥ずかしい事でもあったのだろうか?

つかさが、保健室を出て行き俺は再びベットに体を預けた。そして、もう一度眼を閉じて一眠りしようかと思ったその時。ボフっと、布団の上から俺は体に重みを感じた。

何かと思い、瞑つた眼を数秒で開く。

「薰君。あの子は何?」

サーと血の気が引いていくのが分かる。そして、体中がガクガクと震えだす。冷や汗が止まらない。あの福谷奈々が馬にでも乗るかのように、俺の体の乗っているのだから。

「な……な……」

「薰君。もう一度聞くよ?あの子は何?」

俺の上に乗つたまま、奈々は顔をズイッとキスでもしそうなぐらい近づけてくる。

やばい。ただでさえ、女にこれ程密着されたら意識が飛ぶかもしないのに、相手が俺の女性恐怖症の根源とあれば尚更やばい。

「つ、つかさは、お、俺の友達……」

「ふうん」

そう言って、奈々は俺から顔を引き離す。俺は今にも意識がどこかに飛んでしまったようになっていた。だが、それを奈々は許さない。

俺の腕の皮膚を思い切りつねつて、痛みで俺を覚醒させてくる。

「ねえねえ。薫君は私が帰ってきてうれしい？　私は帰ってきて、薫君に会えたからもの凄くうれしいよ？　薫君も私と同じだよね？　どうして答えてくれないの？　そつか。私と再開して、嬉しそぎて言葉が見つからないんだね。もう、薫君たらそんなに私の事好きなんだ。恥ずかしいな。でも、私も薫君の事好きだよ。薫君の為なら私何だつてしてあげる。そうだ、今からキスしようよ。あの時は、薫君が恥ずかしがつて出来なかつたもんね。でも今はもう高校生だし、薫君もうれしいでしょ？　あ、でも私ファーストキスだからそんなんに上手くないの。薫君もそうだよね？　薫君が、私以外の女の子とキスなんてしないもんね。そうだ。なんなら、キスが終わつたらしちゃう？　恥ずかしいけど、薫君が望むなら私は全然いいよ？」

保健室でなんて、ちょっとドキドキするね。でも、保健室の先生は今出張中なんだよね。だつたら別に心配する事ないかも。あれ？　でも5時間目が始めるまでに終わるかな？　そうだ。今日はサボっちゃおうか。転校初日からサボるのなんて、薫君の為ならなんとも思わないよ？　だつて、私は世界。宇宙で一番薫君が好きだから。薫君以外の人なんてどうでもいいの」

俺は、限界に近かつた。こいつ、昔と何も変つてない。俺が、こいつをこんなにしてしまつたあの時から何も变つてない。朝のあれは、猫被つてたのか。流石に、皆の前ではこの性格は出さないだろうが、俺が言つたら何も気にしないだろ。

(やばい。つねられている所の感覚が無くなつていいく。ああ、俺落ちるなこれ……)

俺は、奈々の言葉に答えないまま意識を失った。

「ねえ、薰君？寝ちゃったの？もう。恥ずかしがりなんだから。でも、これからは毎日薰君と会える。私すごく嬉しいよ」

そう言つて、一度薰の心臓の音を聞くかのように顔をつける。

小学六年の時、親の都合で転校する事になった奈々。勿論親には物凄く反対したが、まだ幼い子供。一人残すのは心配な奈々の両親は、無理矢理にでも奈々を連れて行つた。

転校先では、とにかく冷え切つっていた。クラスメイトが話しかけても、薰君、薰君、薰君とずっと呟いていた。そのせいで勉強も手につかない。そして、中学卒業をまじかにした奈々は、とにかく必死に勉強した。そして、中学三年の頃には学年一位にまで上り詰めた。

それも、高校生になつたら一人暮らしが両親に認められるからだ。つまり、薰のいる高校に転校する形で入試に引っかかるため勉強した。それ程までに、奈々は薰の事が好きだった。だが、奈々は普通に好きの限度を超えていた。それも、小学生の頃に薰が原因で、こうなつてしまつた。

薰も、そんな奈々が原因で女性恐怖症となつてしまつた。

昔、二人の間には色々とあつた。これは、そんな二人の関係を描いた物語……。

(後書き)

ども。ヤンデレってのを、上手く書けていたでしょうか？

てか、実際にこんな入っているんでしょうかね？いたら色々とやばいですが・・・

一応、連載として書きました。でも、なんだか自信がなくて・・・  
出来れば感想などを頂ければ、嬉しいです。ではでは～

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9223m/>

女性恐怖症の俺とヤンデレの幼馴染

2011年3月31日10時56分発行